

「現在」に対峙する

ドラマトゥルク 石本興司

「我々こそがバグかもしれない」

それは言い得て妙でした。

庄波希と新宅加奈子、若きふたりのアーティストが美術館の一室にどのような時空を創造するのか、その興味と期待からこのプロジェクトは始まりました。ふたりはまず、「バグと対峙する」というキーワードを掲げました。「バグ (bug)」とはコンピュータプログラム上の不具合のことを指しますが、コロナ禍における社会生活やシステムの不全をこの「バグ」に見立てたのです。

さて、「この美術館の一室において我々こそがバグかもしれない」という実感にふたりが至るのに、それほど日はかかりませんでした。「美術館の一室」という条件がふたりのクリエイションにさまざまな制約を課していたからです。絵の具という液体を全身にまとう新宅の身体表現はもとより選択の余地がありませんでした。ダンサーが動くアクティングエリアを通常のあり方で確保することも困難であり、設置できる照明や音響設備にも限りがありました。しかし、それらの制約をスタッフとともにひとつずつ検討し、受け入れることで、その後にプランを実現化させる方法を生み出して来たことは確かです。コンピュータにバグが見つかるということは、そのバグの改修により必ずアップデートされることを意味してもいます。むしろ「不具合」を契機としながら、ふたりのクリエイションはゆっくりと動き始めました。

未来に向けて歩く

私が今これを書いている時点でプロジェクトの全容は見えてはいません。いまだ模索の渦中にいます。しかし、私にはこの霧の先に見たことのない風景が広がるだろうことを予感しています。そして、おそらくそれは「未来に向かう」ことについての風景です。

「未来に向けて進む」ということを「歩く」ことで表すとき、たいていのひとは前方に未来を見立て、その方向に顔を向けて進むでしょう。しかし、新宅はそのようなやり方を安易に選ばないように思います。後ろを向いて背中側に進む。過去にしかと目を向けつつ、背中中で未来へと向かって切り進んで行く。そういう方法をとるように思えるのです。ありったけの過去に腕を伸ばし、抱え込み、その凝縮として現在という一点を成立させようとする。絵の具をまとう新宅の背中に私が感じたものは、このような「現在」でした。一見して静止した身体、流れた時間の痕跡として提示された静物、それらは「過去」との絆を結んでいるからこそ「未来」に向けて輝きを放っています。そして、これが新宅の「現在に対峙する」あり方です。

一方、庄は多くの人と同じように顔を前に向けて未来へと進むでしょう。ただし、彼はその両目を自らつむるはずで、あえて視覚を断つことで他の身体感覚を起動させ、それによって未来へ向かうことを自らに課します。思えば、この2年、我々は「遠隔」を強いられ、視覚以外の身体感覚を使わないことが増えました。対象に近づき、自らの手で触れることをあきらめてきました。大量の情報を一度に取り込むことに視覚は優れています。それに比べて、触覚が取り込めるのはいつでも断片にしか過ぎません。しかも、視覚的な情報が他者と共有しやすいのに対し、触覚におけるそれは個人の体験でしかないとも言えます。庄の作品では、ダンサーが自身の内面にフォーカスを向けたり、予期せぬ感情に出会うのを目撃する 때가あります。これはダンサーが「個人の体験」として動いているからなのではないでしょうか。視覚的ではなく、触覚的に「現在」を捉えようとする。それゆえに観客はその一瞬ごとに立ち会うことを余儀なくされ、作品は出来事と化すのです。これが庄の「現在に対峙する」あり方です。

バグよ、人類の身体へ寄生せよ

ここで、このプロジェクトで私がもっともスリリングに感じていることを告白しておきます。それは、

ふたりのアーティストが互いのクリエイションを互いの障害になっているかもしれないと感じていることです。「バグと対峙する」。このことばをはさんで、ふたりこそが対峙しているのではないかと見えることです。

「バグ (bug) 」とは本来、例えば蛾のような「虫」のことです。「アート (art) 」とは本来「人工」のことです。私の中で、「コンピュータ (人工) に入り込んだ 2 匹の蛾 (自然) 」のイメージーションは「都市に蔓延するウィルス」を経由して「美術館の一室 (アールスペース) に迷い込んだ人間の身体」へと辿り着きました。

私はいま目の当たりにしています、断片的でつながりを欠くようにさえ見えていたふたりのクリエイションが有機的なつながりを持ち始めているのを。それは互いが互いの障害となっていることを受け入れ、アウフヘーベン (止揚) することです。これはすでに「希望の風景」です。

今日、私たちは暗くて深い霧の中でもがく数匹の虫 (bug) を見るでしょう。闇の中で震える、その羽虫の音を聞くでしょう。虫たちが暗闇で光に集まるのは、そこに太陽の光 (紫外線) を感知するからです。やがて私たちは触れるでしょう、人間の身体に寄生した蛾の群れが鱗粉を散らし陽の光を目指す「現在の風景」に。蛾よ、人類の身体へ寄生せよ。そして、「希望」へと向いて飛翔せよ。

石本興司

ドラマトルク・俳優・演出家。「兵庫県立ピッコロ劇団 (代表・別役実)」の中心メンバーとして俳優・演出・表現教育の分野で活動。2002 年文化庁在外研修員として英国演劇留学 (特別派遣)。兵庫県芸術奨励賞など受賞。NHK 朝ドラ「わかば」、NHK 時代劇「はんなり菊太郎」など、テレビ・映画にも活動の場を広げ、2006 年よりフリーランスとなる。2013 年より大阪芸術大学舞台芸術学科准教授。同志社女子大学・東京都立総合芸術高等学校・新国立劇場演劇研修所・代官山俳優塾 (ダンススクエア代官山) でも講師を務める。